

## わが胸の燃ゆる思い

㈱電通総研 所長 天谷 直弘

わが胸の燃ゆる思いにくらぶれば煙は薄しさく  
らしま山

維新の志士平野国臣の歌である。ふりかえってみると、黒船来航以降の日本人は、「わが胸の燃ゆる思い」に衝き動かされてきたという感が深い。日本人の胸のうちにたぎったこの「マグマ」のようなものの正体は何であったのか。

幕末から明治期は帝国主義全盛の時代で、中国は既に半植民地化し、日本もまた国家存亡の危機に立っていた。このような状況によって点火された強烈な攘夷ナショナリズムのエネルギーが「マグマ」を上昇させたことは明らかである。

幸か不幸か、当時の欧米勢力は一面では帝国主義という「野獣」の顔をしていたが、他面では近代文明という「美女」の顔も持っていた。ペリーの黒船は「野獣」であるとともに、またとびきりの「美女」でもあったのだ。

「たった四杯で夜も眠れ」なくなったのは、黒船の大砲が心底こわかっただけではない。蒸気機関で動く鉄の船という近代文明が特別魅力的であったこともまたその理由であった。明治期の日本人の胸の裡では、欧米勢力の武力の野獣性に反撓する攘夷ナショナリズムと西欧文明の美女のような魅力を讃美するキャッチ・アップ・ナショナリズムとが葛藤したが、結論としては、欧米の武力に負けないために、なによりも先ず欧米文明を摂取しなければならないという理性的判断が優越した。福沢諭吉の「脱亜入欧」というスローガンは、このような明治人の判断のもっとも尖鋭な表現である。

大正期特に第一次大戦後になると、それまで抑えこまれていた反欧米・国粋・攘夷のナショナリズムの反撃がはじまった。昭和期になると、反欧



米派の勢力が急速に強まり、親欧米派を圧倒し、ついには日米開戦にまで暴走してしまったのである。

反欧米派は本来ならば反帝国主義になるべきところであるが、実際はそうならなかった。彼等は持たざる帝国主義としての不満を爆発させ、持てる帝国主義国すなわち米英と対立抗争する方向に情熱を燃やしたのである。情熱が先行して理性が不足していた反欧米派主導の日本は、欠陥ロケットのように空中爆発して果てた。

戦後の日本では、親米派が復活し、圧倒的主流となった。輝かしいアメリカ文明のハードとソフトを大量に輸入し、まずは経済面で欧米にキャッチ・アップすることに国家目標を確定した。日本人はアメリカの技術を導入し、GNPを高度成長させ、「三種の神器」や「3C」のようなアメリカ生まれの文明の利器を購入することに、「わが胸の燃ゆる思い」を白熱させたのである。

戦後昭和期は冷戦構造の時代であった。この世界において日本が、アメリカにリンクした専経済路線をとることは、アメリカの世界戦略と基本的にマッチしていた。そこで日本は、「ボックス・アメリカーナ」の世界において、伸び伸びとプレイをすることができ、最近ではこと経済に関する限り、アメリカと肩をならべるほどになってきた。ペリー以来日本人が抱いてきた夢がようやく実現となったのである。

以上ペリー以来最近までの日本の歴史を見ると、そこに赤々と燃えている「胸の思い」を観察することができる。その正体は、欧米という存在を強

く意識し、それに対するおそれ、あこがれ、劣等感、キャッチ・アップ情熱等が混合している可燃性ガスのようなものであろう。ともかく、この可燃性ガスに火がつき、そこから発する巨大なエネルギーが、日本をあるいは戦争へあるいは奇蹟的経済発展へと駆り立てたのである。

グレイハウンドは、眼の前の悪を追って走る時、生の充実を感じ、その姿は躍動美に輝く。グレイハウンドは眼の前の悪をつかまえた時、危機に遭遇する。追うべき目標は失われ、何を為すべきかに惑い、意気は消沈してしまうからである。

明治から昭和までの日本および日本人は、悪を追うグレイハウンドに似ていた。ところが昭和の末、グレイハウンド日本号は、ついに悪をつかまえてしまった。すなわち経済面において、欧米へのキャッチ・アップに成功したのである。その結果、今日の日本は、追うべき目標の喪失という、明治以来一度も遭遇したことのない危機に遭遇することとなった。

朝野をあげてドルの黒字減らしと円高に悩んでいるという状況の下では、キャッチ・アップ・ナショナリズムは存在理由を失わざるを得ない。日本が世界最大の黒字国、失業率最低の国、世界第二のGNP大国という状況では、もはや被害パラノイアの攘夷ナショナリズムも時代錯誤という外はない。だとすれば、これまで百余年にわたって日本人を動かしてきた「燃ゆる胸の思い」は、ついに御用済みとなり、次の世代はこれを捨ててしまうだろう。

その場合、次の世代が「新しい燃ゆる思い」を創造しなければ、日本はガス欠の車になってしまうおそれがある。ではどのようにすれば、「新しい燃ゆる思い」を創造することができるのだろうか。

ペリー以降昭和に至るまでの「燃ゆる思い」は、欧米文明の出現という外界の事情に触発されて出現した。しかし今日の日本は、情熱を傾けて追求すべき目標の設定を、外界の事情に頼ることはで

きない。

これまでの日本は、黒船やテレビや自動車など、ものづくりに情熱を燃やし、精魂を傾けた。世界一流のものをつくることは容易な業ではないが、しかしそれは国民的理念ないし国家目標に関するコンセンサスの形成という業に比べれば、はるかに易しい。

人間は生まれてから二十才くらいまで、肉体的成長を続ける。したがってこの間は、いかにして強健な肉体をつくるかが問題となる。またこの間人間は、教育を受け、先人が蓄積した知識や教訓の吸収に努める。しかし二十才をすぎると、肉体的成長は止まる。また知識の吸収専門の立場から、知恵知識の創造者の立場へのシフトを心がけねばならなくなる。学校にいつている間は、受験地獄のきびしさを痛感するけれども、ふりかえってみれば受験勉強などは目的も方法も明確に決まっている単純労働である。

黒船来航以来ごく最近まで、日本が欧米にキャッチ・アップしたい、欧米に負けない「黒船」をつくりたいと考えて、営々として努力した時代は、人間が二十才になるまでの努力とよく似ている。この間、日本は強健な身体をつくり、また偏差値競争においても、抜群の成績をあげることができた。それはまことに立派な成功であるが、しかし学生時代の成功が即人生の成功となるものではない。学生時代の勉強が単純労働だとすれば、人生の勉強は、はるかに複雑高次の人間的労働である。単純労働の目標は他者が設定してくれるが、人生の目標はみずからが設定しなければならない。それはみずからが納得するとともに、他者も賛同してくれるものでなければならない。

現在の日本は、一流校を卒業したけれど、これからなにを為すべきか、について確信を持つことができない青年のように見える。